

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(全巡回担当校)

生徒が主体的に活動できるよう授業研究や学年・学級経営をしたり、生徒情報をこまめに共有したりした。その取組が、不登校の未然防止につながっていると考えられる。そうした取組をより意識的に行うことで、更に不登校が生じにくい学校となるよう、巡回教員から様々な働きかけを行った。



今年度、校内委員会への参加や通常の業務に加え、巡回教員として「居場所づくり」と「きずなづくり」のための校内研修会に携わった。多くの業務時間を校内別室での個別対応やアウトリーチに費やすため、実際の授業や学校行事にはなかなか参加できないが、先生方の不登校への理解を深めるために研修を計画した。



また、不登校生徒への直接的な関わりに加え、外部機関との連携を図ったり、三者面談に同席したりするなどの機会が徐々に増えている。巡回教員は、生徒の支援だけでなく、学校の支援体制を強化することも重要な役割であると言える。

【取組2】(A中学校)

どの生徒も前向きに取り組める分かりやすい授業展開により、生徒の自己存在感が高まっている。また、ハンドサインを用いて質疑応答をすることなどを通して、生徒が授業に安心して参加でき、自己決定できるようになってきている。様々な工夫がなされていることで、生徒が信頼関係の中で授業に参加することができている。

【取組3】(A・B・C・D中学校)

各校で日程調整をし、巡回教員による研修会を行った。特に、初任の先生や若手の先生にとって、なるべく早い時期での研修機会となるよう1学期中に実施し、学校によっては2学期の準備出勤の期間にも再度実施した。また、研修会が実施できない学校や参加できない先生にも研修の内容が共有されるよう、巡回教員が都教委版の研修スライドを動画編集し、市内全校の先生がいつでも視聴できるよう工夫した。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（B中学校）

毎週1回、不登校対応に特化した会議を開催している。校長、副校長、特別支援教育コーディネーター、養護教諭、生活指導主任、学年教員に加え、SCと巡回教員が参加し、情報共有や各種対応に関する協議を行っている。会議での協議内容は継続的に記録され、職員間で共有している。

アウトリーチによる支援（E中学校）

欠席が長期化する過程で担任と生徒とのコミュニケーションが困難になった家庭へのアウトリーチを始めた。実際に家庭を訪ね保護者と対話を行うことで得られた情報を整理し、担任に支援策を提案している。間接的ではあるが、生徒が自分の気持ちを担任に届けるという意思疎通を始めることができた。

校内別室における支援（全巡回担当校）

巡回する全校で校内別室の運用が始まった。毎日開室している学校は、時間割上で担当を割り当て、巡回教員が不在の場合でも利用生徒が常時入退室できる状態を維持している。特定日の午前中のみ開室している学校は、巡回教員やボランティア職員の勤務日に合わせて開室し、午後の過ごし方は生徒の判断に委ねられている。

どの学校でも、生徒が各自のペースで安心して過ごすことを主眼として支援を行っており、総じて校内別室の開室により登校できる生徒が増えている。多くの場合は生徒自身の選択により各自の学習課題に取り組むが、カードゲーム等で緩やかな時間を過ごしたり、支援員等と一緒に運動をしてリフレッシュしたりすることもある。

デジタル機器を活用した支援（全巡回担当校）

校内別室の入退室情報や活動記録を授業支援ツールで職員室と同時共有し、利用生徒と先生方とのコミュニケーションが図りやすいよう工夫している。生徒一人一人の状況に合わせて、家庭向けに教室の授業を配信したり、生徒との連絡や生徒からの課題提出等に活用したりしている。

関係機関との連携（A中学校）

家庭環境や親子間の問題により校内別室にも来室できない生徒への対応として、SSWと連携し、三者面談に同席する機会を作っている。事務的な調整も含め柔軟な校内体制の下、事前の情報共有と意見交換を行い、保護者と生徒それぞれへのアプローチを検討している。

成果

各校の先生方の協力により、不登校対応巡回教員としての取組が、多様な課題に直面する生徒や保護者への直接・間接的な支援として活用されつつある。

課題

様々な背景が複合して生じている不登校への理解を深め、福祉や医療との連携が十分に行われるようにする必要がある。